

Title	初期日獨通交史の研究(二)
Sub Title	Early history of the intercourse between Japan and Germany (II)
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.34, No.3/4 (1962. 3) ,p.1(255)- 21(275)
JaLC DOI	
Abstract	It was the greatest abstruaction for this matter that the Prussian Navy Department did not come into agreement regarding this delegation. But at the beginning of 1859, the Navy Department had decided to offer two warships, Dampfcorvette "Arkona" and Segelfregatte "Thetis". Then that settled this case. At first Frhr. von Richthofen was nominated as chief delegate, but all at once he resigned his post becouse he was not satisfied with his salary. Then Graf, von Eulenburg was apointed in Oct. 1859. He continued Frhr. von Richthofen's preparation and at the beginning of 1860, these two warships started to Japan. In this study, I will discuss these problems, from German sources, that is, the decission of details in the obligations of delegates, the nomination of the members, the salary and treatment for the members, the decission of amount of expenses and the decission of the route to Japan.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期日獨通交史の研究(二)

今 宮 新

第二章 日普條約締結の研究

本稿は日普條約締結の研究と題しているけれども、内容は、これに至るまでのプロシヤ政府の動向、即ち使節の決定、準備及び使節の出發、その日本到着等について、プロシヤ側の史料によつて研究したものであつて、日普條約の締結過程等については、すべてこれを省略した。それは、これに就いては、すでに先學の研究があるからである。従つて本章はプロシヤの東亞使節派遣の研究と言ふべきものである。なおプロシヤ側の史料を中心としての日普條約締結の過程等の研究は、當然行はるべきであるけれども、これは後日に期し度いと思う。初めに記した如く、本稿が未完成であるということは、これ等の點を指しているのである。

第一節 プロシヤの遣日使節派遣準備 (一) (使節派遣の決定)

さて前稿に於いて述べたように、日米通商條約及び天津條約の締結を期として、プロシヤの東亞使節派遣の計畫は、實現の軌道に乗ることゝなつたのであるが、プロシヤ海軍當局は、これら使節の使用する艦船として、コルヴェット軍艦(Dampfcorvette)「アルコーナ」號(Arkona)及びフレガット軍艦(Segelfregatte)「テーティス」號(Thetis)とを決定するに至つた。先に記した一八五八年十二月附の商務大臣の書翰に對する翌年正月の軍令部よりの返書による

と、ダンチッヒの氣候及び地位の關係によつて、四月末までには「アルコーナ」號の試運轉が不可能であるから、四月過ぎより準備にかゝり、おそくとも七月末までに「テーティス」「アルコーナ」兩艦の遠征準備を完了するであろう、とあつて、この兩艦の遠征参加は確定したのであるが、氣候等の關係上、商務當局の希望したように春までには、その準備を完成することが出来なかつたのである。然しこの兩艦の提供が決定したことは、使節派遣の最も重大な障害を除くことゝなつたのであつて、これによつてプロシヤ政府當局は、その永い間の希望であつた極東進出を愈々実現し得ることゝなつたのである。汽走三檣軍艦「アルコーナ」は二三二〇噸であつて、ダンチッヒの王立造船所に於いて、一八五六年より一八五八年にかけて建造されたものであり、當時未だ試運轉が行はれていなかったものである。帆走三檣軍艦「テーティス」は一五三三噸であり、一八四六年プリマウスで建造され、プロシヤ政府が購入したものである。(Preussische Expedition nach Ost-Asien. Vol. I. Einleitung 参照)

以上の如く一八五九年七月末までには、遠征参加の軍艦の準備が完了することが明白となつたので、プロシヤ政府當局は派遣使節の人選を始めることゝなつたのである。商務大臣ハイトは、すでに前年秋外務大臣に對して、使節として總領事レーヴィンハーゲン等を推薦したのであるが、一八五九年二月に、彼は外務大臣シュライニッツに對して、公使フォン・リヒトホルフェン男爵(Erhr. von Richthofen)を適任者として推薦しているのである。この頃前ブラジル總領事シュトルツ(J. D. Sturz)なる者が、日本及び其他の諸國との通商についての意見書を提出して、自己推薦をなしているが、これは當局に取り上げられなかつた。これを以て見ても、當時極東への使節派遣のことが、次第に一般に知られ、獨乙國內外の人々から種々の運動が行はれたことが推察されるのである。兎に角、海岸當局より軍艦使用の許可を得るに至つたことによつて、一八五九年(安政六年)の初頭よりプロシヤ政府は、極東使節派遣の準備を着々進

めることゝなつたのである。

さてプロシヤ政府當局は、日本と條約を締結して日本の事情に通じていると思はれる各國の駐在使節に對して、種々の問合せを行つていたのであるが、この中で、日本への贈物に關してヘーグ駐在公使より興味ある報告があるので、次にこれを記してみる。

「オランダが日本と新條約を締結するに際して、日本政府に贈與した贈物に關する貴問については一八五六年二月の報告を參照され度い。日本への贈物は、皇帝の肖像、電信機及び艤裝した蒸汽軍艦であつた。一體東洋諸國に於いては、贈與したものよりも上等な返禮をもらうために、贈物をなすことが周知の慣習となつてゐる。然しオランダは上記のやうな蒸汽船と同價値の返禮を受けたかどうかということが、先月十六日（一八五九年三月）の下院で問題となつたのである。人々はこのやうな東洋の慣習を否定して、アメリカ及びプロシヤは少しも贈物をしないで、たゞ大砲を積んだ蒸汽船を見せたゞけで、直ちにオランダより良い條件を以て條約を締結することが出來たという實證を擧げた。然し殖民大臣はこれに反對して、英國がまた蒸汽船を日本に贈與したとしても、その返禮はオランダと同様のものではあつたかどうか、當分このやうなことは分るものではないと抗辯したのである。當地の人々は、最近條約を締結したフランスは、それほど價値のある贈物をなさなかつたと信じてゐる。少し余裕を與えらるゝならば、この事に關して、カツテンディック男爵 (Kattendijcke) より正確なる報告を得ることは容易である。男爵は前のヘーグの公使館書記官であつたフランス使節に對して、現地でかゝる事柄に關する指示を與えたに相違ないからである。オランダ海軍士官であり且つ赤色鷲章の所有者であるこの貴族は、この秋に日本より歸國することゝなつてゐる。彼は二年以前に日本の海軍を教授するために派遣せられたのである。日本の海軍を創立するために、當時日本政府の費用によつて、多くの機械類と勞働者が日

本に送られ、またこれに關する種々の注文が日本からアムステルダムに宛てゝ發せられたのである。然し最近の報告によると、このような事に關しても、日本に於いてオランダ人は徐々にアメリカ人にその優位を奪はれつゝあるようである。

當地に於いては、一八五四年十月の報告に記した如く、今まで全く無意義であつた東洋貿易を隆盛ならしめようとして大いに努力している。先の報告で述べた退職オランダ軍醫ドクトル・フォン・シーボルトが有名なオランダ商會社(Holländische Handels-Maatschappij)の代理人として、この目的のために十四日ばかり前に(一八五八年四月初旬)日本に向つたのである。然し人々は、彼が九年間滞在した時とは全く事情の異つてゐる現在に於いて、果して好結果を得るかどうかを疑つてゐる。彼は初めオランダ政府の役人として赴任し度いと政府に請願した。然し殖民大臣の言うところによれば、彼は以前日本政府より追放された者であるために、このような者を役人とすることは、日本政府の感情を害しはしないかという懸念があつたために、彼の願ひは却けられ、彼は政府の役人として日本に派遣されなかつたのである。確かにシーボルトはプロシヤ政府に對しても、役人として任用さるゝことを願ひ出るものと思はれる。而して更にまた彼以外に、プロシヤ使節は現地に於いて、英國副領事アーネス・レー(Annes Ley)と連絡をとることが好都合であると思はれる。彼は獨乙系であり、且つ極めて親切な男である。この青年は數週間以前に新任地に出發したのであるが、その日本に赴任させられた主なる理由は、彼が日本に於ける外交語であるオランダ語に熟達してゐたためである。去年八月十八日に日蘭間に締結された條約は、日本の批准が行はれないために未發表であるが、アムステルダム新聞に掲載されたものがあり、ゴールドスタイン男爵(Goldstein)もその内容を正確なものと認めてゐるから、取りあえずそれを御送りする。」(一八五九年四月二十一日附フォン・ケーニヒスマルク伯より外務大臣宛)

以上の報告によると、歐州各國とも東洋諸國、特に日本の慣習等についての知識が少なく、日本政府への贈物等について不必要なほど關心をもち、各國ともこれについて種々の考慮を拂つていたこと、カツテンディックなる者が日本海軍の指導に當つていたこと、シーボルトがオランダ政府の官吏として派遣されることを希望していたこと、アメリカ人が日本に於けるオランダ人の優位を奪いつゝあること、などの事が知られるのである。

かくの如くして、極東への使節派遣の準備は着々と進行しつゝあつたが、一八五九年七月末の軍令部よりの通達によると、「デーティス」及び「アルコーナ」兩艦以外に、スクーナー船「フラウエンロープ」(Schooner "Frauenlob")が参加することとなり、これらの諸船は、いづれも十月初旬までに遠征準備を完了すること、これらの艦隊の訓練、艦装等は、すべてシュレーダー提督(Schroeder)に委任されたことなどが知られるのである。「フラウエンロープ」號は九五噸で一八五三年から一八五四年にかけて建造されたものである。かくて更にプロシヤ政府は、軍令部より遠征に参加すべき使節、商業代理人、科學者等の人數の通知を要求されたので、各方面の人選を急ぐこととなつたのである。八月初め、使節に推薦されていたハンブルグ駐劄プロシヤ全權公使フォン・リヒトホーフエン男爵は、外務大臣に對して次の五ヶ條の要求を提出しているのである。

- (1) 使節在任中の俸給は、危険、艱難及び殘留家族等を考慮し、且つ他國の使節派遣の制度を參照して當然増額すべきこと。
- (2) 恩給についても各自の地位に相當する規定を制定すべきこと。
- (3) 在任中に死亡したる場合は、妻及び未教育の子弟を國家が責任を負うべきこと。
- (4) 任務遂行後歸國したる場合は、歐州に於いて相當の地位を得るまで一定の規定により俸給を支拂ふべきこと。而してその額は、米國使節の場合より少額ならざること。更にまたかゝる危険なる使命を遂行したる後には、相當高位の地位を與うべきこと。
- (5) 高等法院司法官試補の地位にあり、現在予備士官として召集されている次男を公使付官吏として同行すること。

以上の要求に對して、外務大臣は大藏大臣其他と協議の上、これを決定することゝなつたのである。

かくて使節派遣の議は、いよく具體化され、一八五九年八月九日、外務大臣シュライニッツ (Schleinitz) 大藏大臣フオン・パトウ (v. Patow) 副提督シュレーダー (Schroeder) 使節フオン・リヒトホーフエン男爵 (v. Richthofen) 局長ホルン (Horn) 公使館參事官フィリップスボーン (Philipsborn) 最高參事官デルブリック (Delbrück) 同ヘーネ (Hoene) 參事官レンブク (Lembke) 等の會議によつて、次の事項を正式に決定するに至つたのである。

(1) 遠征の目的を中國、日本、タイ諸國及びハワイとの通商貿易條約の締結に限定すること。艦隊の航行もこの目的以上に出ないこと。

(2) 外務大臣は、全權使節としてフオン・リヒトホーフエン男爵を任命すること。使節と艦隊の司令官とは密接な協定を保ち、上記の目的のため各自努力すること。

(3) この遠征に参加すべき艦隊、Fregatte "Thetis", Schrauben-corvette "Arcona", Schooner "Frauenlob" は十月一日にダンチッヒ、またシュウエネミンデを出航すべきこと。

使節及びその一行は陸路エジプトを経て、艦隊と同時に翌年四月シンガポールに到着すべきこと。

(4) 遠征に参加すべき人員は次の如きものとする。

使節

公使館書記官 一人

公使付官吏 二人

科學研究員 二人

商業専門家 三人

(5) 商務省より商業團體に通告して、東亞方面に販路を獲得し得べき商品を選択せしむること。貿易商の個人的参加は禁止すること。

(6) この遠征を科學的研究に利用すべきこと。このために外務大臣より文部大臣に對して、二人の科學者の選擇を依頼すること。この學者は遠征中商業専門家と同様に使節の指揮に従うものとする。

(7) プロシヤと同時に、關稅同盟の名を以て條約を締結するや否やは、外務大臣が一時保留し、これに關して直ちに他の同盟諸國に通達すること。また同時にその商業團體にも通達すること。條約締結に参加することを希望したハンザ都市については、リヒトホーフエン男爵に委任して相談せしむること。メクレンブルグ・シュウエーリンに對しても同様にリヒトホーフエン男爵に委任すること。

外務大臣は贈物及び條約草案の決定、同盟諸國に對する通達を至急行うこと。

(8) 大藏、外務兩大臣の協議の結果、遠征に關する費用はプロシヤだけで負擔すること。

(9) 使節の俸給及び交際費、使節の歸朝後、奉職するまでの期間の俸給等に關するリヒトホーフエンの要求及び参加各人の報酬については、大藏、外務兩大臣が近々の中に協議して決定すること。

以上の如くプロシヤ政府は東亞への使節派遣に關する具體案を決定したのである。而してこの事を最も希望し、且つ熱心に運動した商務大臣ハイトは、この決定をみるや直ちに各商業團體に對して、この事を通達し、商品見本を選択すべき指令を發しているのである。ついで八月十五日の勅令を以て、

(一) 中國、日本、タイ各國及びハワイと條約を締結するために使節を派遣すること。

- (二) リヒトホーフエン男爵を使節に任命すること。
 - (三) テーティス、アルコーナ等の艦船をこれに使用すること。
- の三ヶ條が裁可されるに至つたのである。

以上述べたように一八五九年八月中旬に至つて、プロシヤの遣日使節派遣のことは正式に決定し、これに使用すべき艦隊、使節及びその目的等が具體化され、勅許を得ることゝなつたのである。かくしてこの後數ヶ月間にわたつて参加人員の選任や其他の準備が行はれることゝなつたのである。

第二節 プロシヤの遣日使節派遣準備 (二)

さてプロシヤ政府當局は、一八五九年八月九日の決議要項に従つて、着々使節派遣の準備を整えることゝなつたのであるが、先づ第一の問題は、この遠征に参加すべき人員の選擇にあつたのである。

これらの参加人員の人選については、使節リヒトホーフエンが主としてこれを行つたのである。彼が先に要求したように、彼の二番目の息子ルードウィヒ・フォン・リヒトホーフエン (Ludwig v. Richthofen) は公使館付官吏に任ぜられた。而して彼はまた書記官としてカール・ピエーシエル (Carl Pieschel) を推薦している。ピエーシエルは前に上席裁判官及び司法官試補の職にあつたが、相當の資産を有するためにこの職を辭し、數年間東國及び各地方に旅行し、リヒトホーフエンの祕書としてメキシコに同行し、後にプラレスト總領事、カイロ領事等に任ぜられた。メキシコ滞在中も各地方に旅行し、カリホルニヤ等にも行つてゐるのである。四等赤色鷲章を授けられてゐる。こゝに遠征に参加する人々の待遇に關する一例として、リヒトホーフエンの要求したピエーシエルの遠征参加條件を見ると次のようであ

る。

- (1) 書記官たる地位を與うること。
- (2) 年俸二千四百ターレルとし、十月一日より任務遂行後三ヶ月間これを支拂うこと。
- (3) 旅行中の必要なる滞在費を支拂うこと。
- (4) 支度費は海軍士官と同額にすること。

かくてピーシエルは船上に於ける商品及び商業専門家等の監督、シンガポールに至るまでの途中の状況を政府に報告するために、ダンチッヒより乗船することゝなつたのである。参事官フィリップスボーンは、他の一人の公使館官吏として、フォン・ブランド中尉 (v. Brandt) を推薦した。彼は現役終了後エジプト及び其他の地方を旅行し、且つ文筆をよくし語學も達者であり、更に人格商才ともすぐれている者である。しかも彼の父ブランド將軍もリヒトホーフェンに對して、その子の遠征参加を依頼するところがあつたのである。なお好都合のことは、ブランドはエジプト滞在中ピーシエルと面識があり、さらに軍隊關係で、ルードウィヒ・リヒトホーフェンとも知り合いであつたのである。彼の俸給は、月額百五十ターレルの割合であつた。以上の三人の中で、ピーシエル及びブランドの二人は、後に遠征に参加している。

さて一方、王立科學院は文部大臣よりの遠征参加科學者の人選依頼に對して、フォン・マルテンス博士 (v. Martens) を指導者として推薦したのである。彼は動物學を専攻し、科學院の動物博物館に勤務しているものであつた。さらにまたその補助者としてヘンゼル博士 (Hensel) を推薦している。

植物學關係では、園藝家ショットミュラー (Schottmüller) を選んでいる。彼はボン及びパリで研究したものであつた。さらにまたウィヒラ (Wichura) を推薦している。彼は元來法律を専攻した者であつたが、永い間植物の研究に

従事し、特にラップランドに旅行して研究を行い立派な研究結果を得ているのである。この時はプレスラウ参事官の職にあつた。

またクレフト (Krefft) を推しているが、彼はニューヨークに於いて動物學を研究し、オーストラリヤに行つてその地方の動植物を研究したものであつて、動物學、人類學の方面に於いて優れた才能を有しているから、マルテンス博士の助手として適任者であると認められたのである。この他當時、即ち一八五九年八月中旬に於いては、自然、礦物、地理、化學方面に關する適當な學者は、未だ選任されなかつたのである。以上推薦された人々の中で、後に實際遠征に參加した者は、マルテンス、ウィヒラ、ショットミューラーの三人であつた。

上に述べたように、八月中旬にはすでに各方面の人選が進んでいたのであるが、一方リヒトホーフエンは、特に日本及びタイに對する贈物に關して、次の如き提案をなしているのである。即ち國王の肖像、大都市及び一般の景色、城郭教會等の繪畫、獨乙各國の貨幣の蒐集、獨乙國全體及び一國の模型或は繪畫、繪入り美裝の書籍、寫眞機二組、繪畫用具、巧妙な小機械類、武具類、各種類の軍裝、全軍隊を示す人形、玩具仕掛のある時計類、各種の酒類等の十四種類を適當としているのである。

かくて八月十九日に至つて、外務大臣及び海軍當局に對して、軍艦の使用許可とその艤裝を命ずる勅令が下されたのである。商務大臣は八月末に、商務省の立場からこの遠征に關して外務大臣に對し次の三ヶ條の目的を提示したのである。

- (1) 中國、日本、タイ各國と和親通商條約 (Freundschaft-Handels-und-Schiffahrts-Vertrag) を締結し、さらに出來得れば、ハワイとも同様な條約を締結すること。

(2) 通商に關する各地域の法律、制度、慣習等の周到なる調査、今後有望と見られる商業の調査、特に現在に於ける商業地としての價值を概括的に認知すること。

(3) 各地に領事を設置すること。これについての適任者を調査すること。

この頃また、畫家ハイネ (Heine) を遠征に参加せしむることが決定されている。彼はアメリカ使節ペリーの日本遠征に製圖家として参加し、彼によつて畫かれた製圖は、後に米國大統領に報告されているのであつて、彼の日本に關する多くの知識が、特に重視されて、リヒトホーフエンもその参加を希望したのである。たゞし彼を公使館付官吏に任命しようとした外務省の意向は、リヒトホーフエンの反對のために中止され、彼は畫家として参加することゝなつたのである。

一八五九年九月中旬頃は、遠征費用及び参加者の俸給等の打合せが行はれる一方、關稅同盟諸國に對しても、その参加が協議され、各商業團體に對しては、極東に送るべき各地方の產物を、ベルリンに送付すべきことなどが通達されているのである。當時まだ遠征に参加すべき三人の商業代表者は決定していなかつたのであるが、ザクセン政府當局はプロシヤ政府に對して、さらにこれら以外に一人の商人を参加せしむることを希望していたのである。このザクセンの商工團の代表者となつた者がシュピース (Gr. Spiess) である。彼の記するところによると、彼は一八五九年八月に、この遠征に商人の参加することを知り、これに参加すべき種々の運動を行つたのである。バイエルン、ウィルテンブルグ、バーデン等よりも商人参加の要求が出されたが、いづれも拒絶されているのである。彼は一八六〇年一月になつて初めて遠征参加の許可を得ることに成功したのであつた。(Spiess, Die preussische Expedition nach Ost-Asien, S. 9—11)

これらの遠征に参加する商業代表者の任務について、商務大臣は次のような意見を有していたのである。即ち商業を

代表する人々は、將來の東亞貿易についての資料の蒐集を行い、これを使節の參考に供し、使節はこれを基礎として、政府に對して商業貿易に關する報告を行うこと、また彼等は商人として、この使節の目的を遂行するために極力援助すべき義務を負うことである。従つて参加を任命された商人は、政府の代表者となるべきものであつて、その費用は當然商務省に於いて支辨すべきものであり、學術關係の参加者と同様の待遇を受くべきものである。

他方また、各地に設置せらるゝ領事に、如何なる人物を選任すべきかについて、種々の意見が出ているのであつて、商人をこれに任ずることが適當であるとする見解も有力であつた。これに關してリヒトホーフエンは攝政に對して、治外法權を有する領事の職業は、極めて重要なものであるから、商業とは無關係の官吏を任命し、この領事によつて所謂商業領事を選任せしむべきであるという要旨の意見書を提出しているのである。

さて次に少しく遠征に關する費用について記してみようと思う。一八五九年九月下旬に、遠征についての贈物を購入する費用として、八千ターレルを支出すべきことが裁可されている。また一方科學院からは、研究費用及び其他の費用として、次のような予算が提出されているのである。

(A) 準備費

(1) 機具費 一、〇〇〇ターレル

(2) 参加者準備費(一人、五〇〇ターレル) 一、五〇〇ターレル

合計 二、五〇〇ターレル

(B) 俸給

(1) ウィヒラ及びマルテンス、各人月額二〇〇ターレル

(2) ショットミューラー、月給一〇〇ターレル

合計 月額五〇〇ターレル

遠征期間三十三ヶ月分、一六、五〇〇ターレル

(C) 研究費(旅行費其他を含む) 二、〇〇〇ターレル

總計 二一、〇〇〇ターレル

(ショットミューラーはウィヒラの助手として任命されている)

以上の如く遠征準備は着々として進行しつつあつたのであるが、こゝに突如として、重大な問題が起つて、遠征実現の前途を一時暗澹たらしむるに至つたのである。即ちそれは、使節リヒトホーフエンが一八五九年九月下旬に、辭表を提出したためである。同年十月三日外務大臣より攝政に宛てた書翰には、その事情を次のように述べているのである。

「リヒトホーフエン氏の辭表は全く彼の意志によるものであつて、當局よりこれを促したのではなく、反つてその辭意を思い止ましめようと努力したのである。彼の辭意は、ベルリンに於いて行はれた俸給率の引上げ要求に端を發しているのである。即ち第一は、リヒトホーフエンの補助の人々の俸給引上げの要求であり、第二は彼自身の俸給即ち一萬二千ターレルの定俸給以外に、特別費を支出すべきことについての意見の相違である。

第一の點については、先に彼は書記官には月額二百ターレル、公使館付官吏には百五十ターレルを要求して、これを決定しているのである。然し後に、彼等の船上及び滞在地に於ける給與が問題となり、リヒトホーフエン男は、各地に於ける英國官吏の俸給を例として、これの増額を要求したのである。

第二の點に關しては、大藏大臣は、このような費用を支出するのに臨時費を増額することは不都合であるから、一定の財産部門を作り、これより支出すべきであるという希望を表現した。そしてリヒトホーフエン男にもそのように返答

したのである。このように自分は公正な態度を以て、萬事好都合に解決しようとして、大藏大臣と協議したのであつたが、満足すべき結論に到達し得なかつたのである。

以上のような事情により、彼は辭意を表明することゝなつたのであるが、自分は彼の辭表を陛下に提出すると共に、官吏の身分にある彼を譴責すべきことさいも考えられるのである。即ちそれは、彼がこのような場合に於いて、徒らにその要求だけを実現しようとしているからである。

然しながら、リヒトホーフエンの特別の才能及び遠征についての諸準備は、見るべきものがあるのであつて、誠におしまれるのであるが、現在の情勢に於いては、彼の辭意を阻止すべき手段はないように思はれる。従つて、彼の請願を許されて、東亞海域遠征使節の職を解除せられんことを陛下に乞うものである。

一方遠征の準備は着々進行しつゝあるために、後任の使節の人選が緊急を要する問題である。これについて自分は、現在のワルシャワ總領事フオン・オイレンブルグ伯 (Graf, v. Eulenburg) を適當と認めるのである。彼の性格、才能共にかゝる職務に適し、またアントワープ總領事として、海外貿易關係にも精通しているからである。外務大臣は、彼をリヒトホーフエン男の後任者として任命せらるゝことを請願するものである。」

以上の書翰で明らかのように、使節リヒトホーフエンは俸給問題によつて、その職を辭することゝなつたので、プロシヤの東亞使節派遣の準備は、一時停頓する状態となつたのである。然し一八五九年十月十日附の勅令を以て、リヒトホーフエンの辭職と同時にオイレンブルグ伯の使節就任が裁可され、こゝに再び準備が軌道に乗ることゝなつたのである。然しこの間約二十日間にわたつて、使節問題が紛糾したために、遠征参加を希望した人々は、恐らくかなり失望したものである。當時この遠征に参加することを希望する獨乙人の多かつたことは、この間に提出された參加希望の

願書が十數通にのぼっていることを見ても察せられるのである。ザクセンの商業團よりシュピースの参加を希望した願書も、丁度この頃提出されているのである。

さて一方政府は、オイレンブルグ伯の就任と共に、さらにその準備をすゝめることとなり、一八五九年十月十三日、商務大臣、外務大臣、大藏大臣、文部大臣、副提督シュレーダー、副國務書記官フォン・グルナー(V. Gruner)現内閣公使館参事官フィリップスボーン、現内閣最高参事官兼局長デルブリック、内閣参事官ヘーネ、現海軍参事官ヤコブス(Jacobs)公使館参事官レンブク及び使節オイレンブルグ伯等が参集して、さらに次のような細目の決定をなしたのである。

(1) 「テーティス」號は本月二十日頃までに出航準備が完了する。同艦には、軍人以外に七人の人々を乗船せしめる。

その中に、公使館書記官及び三人の自然科学専門家(植物學者参事官ウィヒラ、動物學者フォン・マルテンス博士、植物助手ショットミューラー)を含む。この人々は本月二十日までにダンチッヒに集合するか、またはポーツマスに直行することを認める。「テーティス」號には商品を搭載する。

「アルコーナ」號は少しく出航が遅れ、來年正月上旬ポーツマスよりシンガポールに向う。來年五月、陸路連絡の人々及び「テーティス」號とシンガポールに於いて會合する。

「アルコーナ」號には五人の軍人以外の人々が乗船し、各國への贈物を搭載する。

(2) 各船の航路は次の如くである。

(a) 「テーティス」、「フラウエンロープ」兩船は、テネリファ、ペルナムブコ、バキヤを経てリオデジャネロに行き、リオデルプラタ、モンテビデオ、ヴェノスアイレス等を訪問し、四月上旬パダビヤに到着、五月初旬にシンガポー

ルに到着する予定とする。

(b) 「アルコーナ」號は、ポーツマスよりシンガポールに直航する。歸路は「アルコーナ」「フラウエンロープ」兩船は歐州に直航するが、「テーティス」號は世界を週航し、ハワイ、バルバライソ、リマ等を訪問せしめる予定である。

- (3) 使節と艦隊司令官とは、目的遂行のために充分に協調すべきこと。また科學専門家に協力すべきこと。
- (4) 黒人奴隸貿易船の如き船舶に遭遇した場合には、これを拏捕すべき手段をとること。
- (5) 外務當局より艦隊の寄港する各國に通知を發すること。
- (6) 各寄港地に於いて使用するために、メキシコドルを用意すること。

以上のような決定の記録は、直ちに關係各方面に通達せられたのである。

さらにまた一方、ウェーン、ドレスデン、ハノーバー、シュツットガルト、カールスルーエ、カッセル、ダルムシュタット、フランクフルト(アム・マイン)、ワイマール、ブランシュワイヒ、オルデンブルグ各地の駐在使節に、リヒトホーフェンの解職とオイレンブルグの就任とを通告すると共に、國外駐劄使節、即ちロンドン、パリ、ペテルスブルグ、ヘーグ、コペンハーゲン、ストックホルム、マドリッド、リスボン、ワシントン、ウェーン等の使節に對して、東方諸國と條約を締結するために、「アルコーナ」艦長海軍大佐ズンデヴァル(Sundewall)「テーティス」艦長海軍少佐ヤッハマン(Jachmann)「フラウエンロープ」艦長一等海軍少尉レッケ(Recke)を派遣すること、艦隊司令官はズンデヴァルであり、全權使節はオイレンブルグ伯である。この事を各國政府に通達して、便宜を與えらるゝことを依頼するようにとの訓令を發しているのである。しかして更に、テネリファ、ペルナムブコ、バキヤ、リオデジャネロ、ヴェノ

スアイレス、ケープシユタット、バタビヤ等の領事に對しても、同様な通知を發し、艦隊の寄港した場合の世話を依頼しているのである。また特に英、佛、露各國の東亞諸國に於ける使節、領事等の住所と姓名について問い合わせるところがあつた。

以上のように對外的に使節派遣を通達すると同時に、プロシヤ當局は國內に於ける準備をすゝめ、すでにリヒトホーフェンが起草した「タイ國との和親通商條約草案十三ヶ條」及びその説明書、「日本との和親通商條約草案十八ヶ條」及びその説明書、最近の貿易關係の記録等を基礎として、種々の研究を行つていたのである。また他方ピエーシエルは正式に公使館書記官に任命され、また遠征に参加することに決定した商人グルーベ (Grube) は、オイレンブルグの依頼によつて、關稅同盟諸國の商工業、主として鐵工業、綿布業等を視察するところがあつた。さらにまた日本及び中國との通商條約は、プロシヤと同時に、關稅同盟諸國も締結することゝなつたために、各同盟諸國に對して、プロシヤ當局の決定した種々の覺書を通告しているのである。

先の十月十三日の決定事項は裁可されて、外務大臣よりオイレンブルグに對して、十一月九日正式に通達されたのである。この内容は大體上記の如きものであるが、たゞ書記官ピエーシエルが商品及び商品見本、また乗船する科學専門家を監督して、その科學的研究の便宜を計ること、定額の俸給から船上の給與を支拂うこと、上陸する時、遠征の目的以外の場合には増給を認めないこと、船中に於ける俸給の支拂いはピエーシエルによること、ピエーシエルはシンガポールに至るまで政府に報告の義務を有すること等が記されている。

さてオイレンブルグ伯はリヒトホーフェンによつてすゝめられた諸準備をそのまゝ受け繼ぐことゝなつたのであるが、特に使節に隨行する人々の人選も、これをそのまゝとすることゝなつたために、幾分の不便を生ずるに至つたのである。

る。しかしてリヒトホーフエンの子息は遠征参加を中止することとなり、その代りに、フォン・ブンゼン (v. Bunsen) がすでにリヒトホーフエンによつて選任されていたので、オイレンブルグは、自分の一族である陸軍少尉アウグスト・ツィ・オイレンブルグ (August zu Eulenburg) 伯を公使館付官吏となすことを請願しているのである。その理由として彼の記するところによれば、ピーシエルとは極く最近の知合いであり、フォン・ブラントとは面識がなく、フォン・ブンゼンについても、その英語力を知っている程度であるので、この長期にわたる旅行には、是非とも身近な者を随行せしめたいというのである。かくてこれは承認され公使館付官吏は三人となつたのである。オイレンブルグは随行員及び彼自身の予算を次のように算出している。

公使館書記官	準備費	五〇〇ターレル	月給二〇〇ターレル
公使館付官吏三人	準備費	一、五〇〇ターレル	月給四五〇ターレル
寫眞 技手	準備費	五〇〇ターレル	月給一五〇ターレル
召使 旅費		五〇〇ターレル	
歸路も同様であるが、書記官が「テーティス」號によつて世界を週航する費用として五千五百ターレル、陸上滞在費二千ターレル、			
案内者、通譯者其他の費用として一萬ターレルを予想されるところに記している。使節自身の費用としては次のように記している。			
準備費	二、五〇〇ターレル		
旅費	一一、〇〇〇ターレル		
滞在費	二、〇〇〇ターレル		
特別臨時費	一〇、〇〇〇ターレル		
合計	二五、五〇〇ターレル		

なおこれ以外に月俸八百ターレル、これの十八ヶ月分一萬四千四百ターレルを總計すると三萬九千九百ターレルとなる。

更にまた以上の外に、製圖家ハイネが參加することゝなつてゐるのであるが、その契約草案は次の如くである。

月俸五百ターレル、準備費（寫眞機其の他）二千ターレル、シンガポールまでの旅費、歸路北京、キャフタ、イルクック、ペテルスブルグ經由ベルリンまでの旅費、當人の死亡した場合は、その妻に生涯一千五百ターレルの恩給を支給し、妻の死亡した場合は、子供の二十一才に達するまで一千ターレルの恩給を支給すること。

さて上に記した第二次決定事項に従つて、オイレンブルグは書記官ピーシエルに訓令を發しているが、その内容は
大體決定事項によつたものであり、たゞ商人グルーベが、「テーティス」號に乗船すること、商人は一定の俸給を支給されず、その諸費用は國庫より支給されること、特にバタビヤ及びシンガポール等に於いて、日、支關係の諸資料を蒐集すべきことなどが附記されてゐるのである。

一方米國駐劄プロシヤ大使は、本國の訓令に基づいて、米國海軍大臣より東方諸國の情報を得てゐるのであるが、特に彼は海軍大臣の紹介によつて、太平洋方面に於いて、最も日本及び中國の海域に通曉している艦長ロヂャース (Rodgers) に面會し、彼が遠征に於いて得た東方諸民族に關する種々の資料及び航海に關する知識を與えられ、更にロヂャースの蒐集した地圖の寫しをとつて、プロシヤ政府に送付してゐるのである。

また米國外務省は、プロシヤ政府へ次のような出版物及び地圖などを贈つてゐるのである。

ペリー遠征記 (三卷)

ペリーによつて報告された太平洋危險區域地圖

ペリー遠征についての諸批判

太平洋に於ける風向及び潮流地圖

ペリーの日本遠征の理由についてのパルマーの小論文

一八五八年六月十八日の米支條約

一八五八年七月二十九日の日米條約

同年十二月二十七日議會に於いて行はれた米國大統領の報告

一八五九年の通信大臣の報告

其他多くの地圖類、例えばセント・ローレンス灣の危險地域地圖、太平洋遠征に際しての米海軍の航路圖、アリーシャン群島地圖、津輕海峽地圖、日本東海岸地圖、日本西海岸地圖、琉球諸島地圖等である。

なおその後ロヂャースは、大島群島、琉球諸島及び戸田港等の地圖などをワシントン駐在プロシヤ大使ゲロット男 (v. Gerolt) に送つていたのである。

以上のようにプロシヤ政府は、その遠征に必要な資料を米國より贈られているのであつて、米國外務省は、必要なる援助をおしまないことをプロシヤ當局に通達しているのである。

かくの如くして遠征の準備はいよゝゝ完了に近づき、乗船する人々は英國に向つて出發することゝなつたのである。即ち書記官ピーシエルは一八六〇年一月十六日ベルリンを出發してポーツマスに向い、ウィヒラ、フォン・マルテンス、ショットミューラーなどの學術研究班もすでに同地に集合し、また商人ヤコブス、グルーベ等も學術班と殆んど同時に同地に到着したのである。但し他の一人の商業代表者ウォルフ (Wolff) はトリエスト、エジプトを経由して陸路によつて、シンガポールに向うことゝなつたのである。

他方艦隊の状態をみると、「デーティス」と「フラウエンロープ」の兩艦は、一八五九年十月二十五日ダンチッヒを出發して、十一月十二日にスピッドヘットに到着した。しかして「アルコーナ」號はその艤裝に時間を費して同年十二月十一日出發したが、北海で暴風にあつて非常な損害を受け、十二月二十六日マルガット港に着し、さらに一八六〇年一月十日サザンプトンに入港して、こゝで修理されることゝなつたのである。従つて「デーティス」及び「フラウエン

ロープ」は「アルコーナ」の修理完成を待たずに、三月十五日に出発することゝなつたのであるが、出発の時期がおくれたために、初めの寄港予定地を變更せざるを得なくなつたのである。また「アルコーナ」及び運送船「エルベ」(Elbe)は出發時期がおくれゝば、シンガポールに直航することが予定されたのである。運送船「エルベ」號は贈物及び食料、燃料等を運送するために、ハンブルグで購入されたものであつて、その出發はおくれて一八六〇年三月七日であつた。そして「エルベ」には又ハンブルグで購入された小汽艇「ヴェスタ」(Vesta)が搭載されたのであるが、これは熱帶地方に於けるボートの曳航、軍艦相互間の連絡、軍艦と使節團との連絡等の港灣の任務に従事するものであつた。

かくてプロシヤ政府は、シンガポール領事アルバート・シュライバー (Albert Schreiber)、ホノル、領事ライナー (G. Reiners)、廣東領事カルロウィツ (V. Carlowitz)、バタビヤ領事ウィルマンス (H. G. Wilmanns) 等に對して、一八六〇年二月十五日附を以て、使節派遣の目的、使節オイレンブルグの任命、派遣艦隊名、シンガポール到着予定期日等を通達して、充分な盡力を依頼すると同時に、シャム語、日本語、中國語及び各地の土語をよくし、米、佛、蘭の各國語、さらにまた出來れば獨乙語を解する通譯を物色し、オイレンブルグまたはピエーシエルの到着と同時に、これを利用し得るようになつてを依頼し、香港、上海の領事にも、これを移牒することを命じているのである。